口繪解說

觀經定善義聞書（金澤文庫藏）

前田聽瑞

近頃快事の一は金澤文庫に對する學界の關心とその探閲攻究である。同文庫はその昔北條氏が武藏國久良岐郡金澤の稱名寺境内に建つる所。佛天の加祐する所か、今尙ほ學界未知の無價の文獻を珍藏すと云へば、その探閲攻究の勝業にして成滿したらば、その吾人を裨益するや蓋し夥大であらう。

今回吾が佛教專門學校教授並に學生等の金澤文庫搜探は法緣淺からず淨宗第三祖然阿良忠上人に關する未知の文獻を數多く授かつた。茲に口繪として揭げた「觀經定善義聞書」(下卷奥書)は卽ちその一。本書は楮紙、大和綴、上下二卷、古香滿紙、これ固より然公の弟子良聖の手記する所なるも、亦た今然阿良忠上人に値ひ奉るの概がある。

建長七年乙卯三月讀了。中間日數三十六日。除闕日八日之定也。同聞衆五十人。

能化然阿彌陀佛生年五十七也。抑〻此定善義者建長六年十二月廿日〻被談始〻。良聖依年始歲末之忿劇等不會九日　是則同正月四日已後値水想觀終之時也。良聖生年二十二歲。闕日八日者所謂十二月廿九日晦日正月一二日同十五日同廿二三日同廿八日是也。

談處下總國所瑳飯塚御庄內松崎鄕福島村也。

以上は然公の直弟良聖の自ら記する所、如何に然公がその甚深の禪慧を以て教化的活動に力精したるを景仰せしむる

のみならず、併せて然公其人の偉大を顯彰し來る、弟子良聖の力最も多きに居るを、推奬禁ずる能はざるものがある。

頃ろ金澤文庫探搜の際幸に眼福を惠まれたる觀經玄義分聞書(二卷)・論註聞書(上卷)・往生禮讃聞書(一卷)群疑論見聞(七卷)等も皆良聖の手記にかゝるもの。良聖の傳は遺憾ながら今日之を明かにし得ないが、これ等の文獻は良聖其人が少壯より然公常侍の高足として多聞筆受の生活を送つたことを確かめ得る偏竟の資料だ。

思ふに良聖は天資重厚、篤學不倦、然公の高足たりしが、終に大に顯はれずして逝きしものゝ如く、恐らく當時に在つては良曉・尊觀・慈心・性眞・禮阿・道光等の諸法將と雁行英を聯ねた上足たりしに相違なく、否、これ等の法將に比して更に幾籌を踰えてゐたかも知れぬ。

近く關宗は然公六百五十年大遠忌を邀へんとす。

吾等は淨土宗徒として然公を永久に禮讃し記念し奉るべき重大の理由と責任とを感ずる。

その奉贊の方法は二三にして足らざらんも、吾等は協力同心、大方の援護を得て然公に關する金澤文庫本を速かに研究し刊行して斯界に贈るの擧に出でんことを念願して止まない。然公を禮讃し記念し奉る可きもの、この擧に於て最も然りとする。

終りに、この口繪は吾が佛教專門學校學生坪井俊映君が去夏金澤文庫に遊んで撮りたるもの。記して以て同君の勞を多とすると同時に、その志の殊勝なることを嘉稱せねばならぬ。